

「弱さの中でこそ」

コリントの信徒への手紙二 12章9節

キリスト教センター主事・日本キリスト教団宇都宮教会牧師 木村 太郎

今日の聖書の箇所は、パウロという人がコリントにある教会に宛てた手紙の1節です。ここで、パウロは自らの弱さについて吐露しています。このわずか1節の中に、「弱さ」という言葉が2回出てきます。

私たちにとっての弱さとは何でしょうか。それは、他人と比べることによって感じる自らの劣等感のようなものであるかもしれません。しかし、私たちの全てが例外なく持っている弱さとは、人生における大切な時を自らコントロールできないという事実から明らかになるのではないかと思うのです。

まず、誕生です。この世に産まれる時、私たち自身、また、その誕生を待ち望む人たちも、その時を決めることはできません。命の誕生という喜びの中においても、私たちは待つことしかできないのです。

そして、病気です。パウロの場合がそうであったとされています。パウロは病気を抱えていて、それをここで「弱さ」と言っているようなのです。

病気になった時、その原因を究明し、治療します。しかし、病気を無かったことにすることはできませんし、それ以後その病気と付き合いなくてはならないこともあります。私たちはまず、病気自体を受け入れるしかないのです。そして、その治癒を待つことしかできないのです。

そして、死です。家族の死、友人の死があります。死は往々にして突然やってきます。息を引き取る時を、当人自身は勿論のこと、周りにいる人たちが決めることはできません。死は、受け入れるしかない最たるものと言っていいかもしれません。

人生の大切な時、私たちは自ら何もコントロールできないのです。肝心な時、待つことしかできないのです。受け入れることしかできないのです。それ以外は何もできない。その時、自らが抱える本当の弱さを否応なしに突きつけられるのではないのでしょうか。

そのような私たちに向かって、神さまは「力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ」とお語りになります。しかし、ここで不思議なのは、誰の力なのか、何の力なのか言われていないということです。

まず、この言葉を、「弱さの中でこそ、あなたが持っている潜在的な力が発揮される」と解することができます。

きるかもしれません。つまり、この力を「あなたの力」、私たち自身の力と理解するのです。

しかし、むしろ、これは「わたしの力」です。神さまの力です。神さまはこうお語りになったのです。「わたしの力は弱さの中でこそ十分に発揮される」。実際にそう訳している聖書もあります。

それでは、神さまの力とは何でしょうか。パウロはそれを、「キリストの力」と言い換えました。つまり、神さまがご自身の独り子イエス・キリストのご生涯において示された力です。

神さまは、この世にイエスさまを誕生させ、その生涯を導かれました。しかし、イエスさまは苦しみを受け、十字架で死なれます。それはまるで無力さの極みのような出来事でありました。にもかかわらず、神さまは、そのイエスさまを死から引き上げ、天へと導いてくださいました。

神さまの力とは、命を与え、苦難をも含めて全ての歩みを導き、死をも乗り越える力なのです。言い換えれば、イエスさまのご生涯を誕生から苦難、そして死を越えて完全に神さまご自身のものとしてくださったことに、その力が示されているのです。

そして、深い慰めと希望は、その「並外れて偉大な力」(4章7節、新共同訳329頁)がこの私たち一人ひとりにも及んでいるということです。つまり、神さまはイエスさまを通して、この私たちをも完全にご自身のものとしてくださったのです。

待つことしかできない、受け入れることしかできないことにおいて、自らの弱さ、無力さに直面することがあります。しかし、そこにおいてこそ、この私ではない、神さまという方がそれらを含めて全てを担ってくださっていると信じていいのです。

なぜなら、「力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ」とお語りになる神さまは、イエスさまを通して、私たちの歩みのその最初から最後の死をも越えて、全てを完全にご自身のものとしてくださっているからです。だからこそ、どのようなことが起ころうとも、希望のうちに一つひとつの歩みを進めていくことのできる根拠があるのです。

<祈り>

憐れみ深い天の父なる神さま、あなたはイエスさまをこの世にお遣わしくださったクリスマスの出来事を通して、私たちの歩みの全てを完全にご自身のものとなさる手続きを取ってくださいました。この時、今年1年も全てがあなたの御手の内にあったことを感謝し、来る1年をもあなたが支え導いてくださると信じさせてください。これらの祈りと願いを、主の御名によって祈ります。アーメン。

2021年12月21日 聖学院大学 全学礼拝